

ガブラーの愛、猫の残酷

——ガブラー版『ユリシーズ』入門ワークショップ報告

横内一雄

2023年10月15日（日）、成城大学8号館008教室でハンス・ヴァルター・ガブラー（Hans Walter Gabler）講演会「愛の復活、そのゆくえ——今、ガブラー版『ユリシーズ』の意義を語る」が開催された。

ガブラーは1984年、ヴォルフハルト・シュテッペ（Wolfhard Steppe）およびクラウス・メルヒオール（Claus Melchior）とともにジェイムズ・ジョイス作『ユリシーズ』（James Joyce, *Ulysses*, 1922）の学術批判版（A Critical and Synoptic Edition）を刊行した¹。同版はその後の『ユリシーズ』研究の定本となっていったため、ジョイス研究者でガブラーの名を知らぬ者はいない²。一方で、同版はそれまで定本として広く使われてきた初版やランダムハウス改訂版（1961）から多数の異同を含んでいたため、刊行当初から激しい論争を巻き起こし、事態は大手メディアをも巻き込んで「ジョイス戦争」とも言われる場外乱闘にまで発展した³。とりわけ大きな反撥を招いたのが、『ユリシーズ』第9挿話に

1 James Joyce, *Ulysses: A Critical and Synoptic Edition*, edited by Hans Walter Gabler et al., 3 vols, Garland, 1984. 緒言によれば、「最初の学術批判版」であり、初版から5000以上の異同と1961年のランダムハウス改訂版からも同規模の異同を含む。「主な編集上の功績は、テキストの構築と、本書左ページにテキスト生成過程を共観的に表示したこと（synoptic display）にあり、本作の批判的読者や冒険的探索者の吟味に供される」（vii-viii）。

2 1988年に『ユリシーズ』の浩瀚な注釈 Don Gifford and Robert J. Seidman, *Ulysses Annotated: Notes for James Joyce's Ulysses*, revised and expanded edition, U of California P, 1988 がガブラー版準拠で再版され、ガブラー版定本化の流れを決定づけた。2022年刊行の新しい注釈 Sam Slote et al., *Annotations to James Joyce's Ulysses*, Oxford UP, 2022 もガブラー版準拠である。一方、ガブラー版とは異なる新たな編集の試みも断続的になされている。主なものを挙げると、Danis Rose, editor, *Ulysses*, Picador, 1997; Sam Slote et al. editors, *Ulysses: Based on the 1939 Odyssey Press Edition*, Alma Classics, 2012; and Danis Rose and John O'Hanlon, editors, *Ulysses*, Riverrun, 2021. その他、1922年の初版復刻版やウェブ公開のデジタル・テキスト版などがある。

3 この経緯については、講演会当日のガブラー版『ユリシーズ』入門ワークショップで南谷奉良が解説した。それによれば、ガブラー版『ユリシーズ』が刊行された1984年には早くもニューヨーク・タイムズ紙や『ニューヨーク・レビュー』誌で取り上げられ、翌1985年にはワシントン・ポスト紙が新版をめぐる論争を「戦争」と表現して報道。同年、ニューヨークで開催された編集文献学会でジョン・キッド（John Kidd）がガブラー版の「誤り」を指摘、ガブラーがそれに回答して論争に発展。1986年には諸氏によるガブラー版評価を集めた論集 C. George Sandulescu and Clive Hart, editors, *Assessing the 1984 Ulysses*, Colin Smythe, 1986 が刊行。1989年にはガブラーとキッドも参加したジョイス学会がマイアミで開催され、ガブラー版を議論。同年から翌年にかけて、チャールズ・ロスマン（Charles Rossman）はそこまでの論争を総括した——“The Critical Reception of the ‘Gabler *Ulysses*’: or, Gabler’s *Ulysses* Kidd-Napped,” Part 1, *Studies in the Novel*, summer 1989, vol. 21, no. 2, pp. 154-81, and Part 2, *Studies in the Novel*, fall 1990, vol. 22, no. 3, 1990, pp. 323-53; and “The ‘Gabler *Ulysses*’: A Selectively Annotated Bibliography,” *Studies in the Novel*, summer 1990, vol. 22, no. 2, pp. 257-69. 1990年にはキッドによるジョイス著作集刊行告知があるも、いまだ実現を見ていない。その後もガブラー版『ユリシーズ』をめぐる議論は後を絶えない。

おける「愛」(Love)という言葉を含む数行の追加である。今回の講演は、この論争の火種ともなった『ユリシーズ』編集上の急所について、ガブラー本人の口から、論争勃発から約40年を経た現在の見解を伺う機会となった。

といっても、一般読者にはこうした編集文献学上の論争の意義や面白さというものが伝わりにくい。ジョイス研究者の中でもこの方面に精通している者は少ないのが現状であろう。実は、1984年のガブラー版『ユリシーズ』はテキストの生成過程や異同、膨大な注を含む大部の三巻本として刊行されたのだが、1986年にはテキスト本文だけを収録した一巻本(The Corrected Text)⁴としても刊行され、そちらでガブラー版『ユリシーズ』を使用している研究者が多い。また、昨今のジョイス研究——ひいては英文学研究自体——が、文献学的議論よりもむしろ作品を歴史的・文化的コンテクストへと開いていく議論に傾いていることもある。

そこで今回はガブラーの講演に先立ち、それをより面白く聴衆に聴いてもらうために、第一部としてガブラー版『ユリシーズ』入門ワークショップを実施することにした。ドイツ文学畑の編集文献学者で、ガブラーから直接指導を受けたことのある明星聖子による導入のあと、ジョイス研究者の筆者(横内)と南谷奉良が登壇してガブラー版『ユリシーズ』の使い方の講習およびその受容史の解説を行った。本稿ではその前半の講習内容を紹介することで、ガブラーの寄稿論文への導入としたい。なお、講習では実例として第4挿話冒頭の数ページ、およびガブラー版の凡例や脚注、尾注、付録の一部を配布して解説したが、それをここで繰り返すことはできないため、凡例等の解説は概略を示すにとどめ、代わりに今後ガブラー版『ユリシーズ』を手取るであろう方々への手引きを補足しておきたい。

さて、そもそも文芸作品が刊行されるまでには、本文はさまざまな紆余曲折を経るものである。刊行も、その紆余曲折が最終決着したことを示すものでは必ずしもなく、時間切れや改稿疲れといった外的要因によって決断されることが多い。刊行後も、作者による改訂や出版過程における事故(誤植)等で、本文が変わることは珍しくない。テキストは絶えざる生成過程にあり、刊行本はそのどこかの段階で時間を止めて形ある商品に落とし込んだものに過ぎない。

概して19世紀から20世紀にかけての時代は、幸運な作家の場合(あるいは不運と言うべきか)、刊行本以外の膨大な草稿が残されていることがある。それより以前の時代であれば、草稿はたいてい失われているだろうし、逆に現代であれば、作家の使用したPCを押収でもしないかぎり草稿段階にアクセスすることは不可能であろう。ジェームズ・ジョイス(1882-1941)はその意味では幸運な世代の幸運な作家であった。代表作『ユリシーズ』は20世紀の古典という評価を受けたため、残されていた準備ノート・草稿・タイプ稿・校正稿類は売買され、やがていくつかの図書館に收藏されることになる。1970年代にはそれまでに収集された文書類がファクシミリ化されてジェームズ・ジョイス文庫(James Joyce Archive)全63巻として書籍化されるに至った。一方、初版以降、

⁴ James Joyce, *Ulysses: The Corrected Text*, Vintage, 1986.

作者の改訂や誤植の修正、さらには折節の伏字・改竄・誤植を含みながら重版を重ねた『ユリシーズ』の本文は、1961年のランダムハウス改訂版でひとまず定本の成立を見ていた。ここにガブラーが参入してくる。ジョイス文庫に至るジョイスの草稿類収集の成果から、まったく新たに『ユリシーズ』の本文を構築できないかと考えたのだ。ジョイスは基本的に、草稿（数段階）→タイプ稿（数段階）→雑誌掲載（数段階の校正と刊行後の修正含む）→単行本（数段階の校正含む）という手順でテキストを執筆していった。ガブラーはこのうち作者手書きの最終草稿（the Rosenbach manuscript）を底本とし、そこに後続の加筆・修正を加えていくという手法で、生成過程を可視化したテキストの構築を企てたのである（三巻本の見開き左ページ）。そしてその手順を経て再構成された最終形態が、作者の意図を最も正確に反映した『ユリシーズ』の本文として見開き右ページに掲載され、2年後に一巻本として刊行された。すなわち、ガブラー版『ユリシーズ』は、生成過程を反映した重層的な左ページと、その最終形態を提示する単一的な右ページから成る。さらに付録には、初版以降の諸刊本との異同を逐一列挙してある。

ガブラー版が批判を呼んだのは、一つには本文構築の出発点とした最終草稿に、ジョイスの意図を推定するための最終審判を置いたことである。すなわち、最終草稿以降の加筆修正において説明できない異同が生じた場合、ジョイス以外の手によるミスと見なされた。ジョイスがミスに積極的価値を見出し、事後的にそれを採用した可能性は、ひとまず排除されたのである（もちろん、構成段階での修正はジョイスの意図によるものとして採用されている）。問題の「愛」のくだりはこうした「ジョイス以外の手によるミス」と見なされた事例の一つに当たる。第9挿話で、ステューヴンが図書館員たちとシェイクスピア論を戦わせている場面である。

—The art of being a grandfather, Mr Best gan murmur. *L'art d'être grandp*

— Will he not see reborn in her, with the momory of his own youth added, another image?

Do you know what you are talking about? Love, yes. Word known to all men. *Amor vero aliquid alicui bonum vult unde et ea quae concupiscimus* ...

—His own image to a man with that queer thing genius is the standard of all experience, material and moral. Such an appeal will touch him. The images of other males of his blood will repel him. He will see in them grotesque attempts of nature to foretell or to repeat himself. (Gabler edition, 1984; 9.425-35; underlines added)⁵

(大意)

——まさに祖父たる^{トベ}技術。ベスト氏がつぶやき始める。^{ラー・ゾートル・グラン}祖父たるす……。

——彼は娘のなかに見ないでしょうか、青春の思い出とともに、もうひとりの面

⁵ Joyce, *Ulysses* (Garland, 1984), vol. 1, p.418. 『ユリシーズ』研究の慣例により、挿話番号の後に挿話内での行数を付す。以下同様。初版およびランダムハウス改訂版は以下の普及版で確認できる。James Joyce, *Ulysses*, edited by Jeri Johnson, Oxford UP, 1993 [the 1922 text]; and James Joyce, *Ulysses*, Vintage, 1990 [the 1961 text].

影がよみがえるのを。

何のことを言っているか、自分でわかっているのか？ そう、愛だ。全ての男が知る言葉。愛は誰かに何か善きことを望むだからそこでわれわれは欲を持つ…。

——才能というあの奇妙なものを持つ者にとって、自己のイメージが、物質的なものであれ精神的なものであれ、あらゆる経験の基準になります。その魅力が彼をくすぐるんだ。一方、同族の他の男のイメージは嫌悪をもよおす。彼はそのなかに、自身を予告したり反復したりする自然の奇怪な試みを見いだすのです。

雑誌『リトル・レビュー』誌 (*Little Review*) 掲載 (1919) 以降、初版からランダムハウス改訂版まで、全ての『ユリシーズ』のテキストにおいて下線部はなかったのだが、ガブラーはこの欠落を「ジョイス以外の手によるミス」と見なし、ガブラー版で初めて復元した。ジョイス研究者がとりわけ驚いたのは、第3挿話でステューヴンが発する「全ての男が知る言葉は何か？」(3.435) という問いに対して、ここで「愛」という明確な答えが提示されたからである⁶。ジョイスは本当にこの答えを意図していたのか？ むしろこの問いを答えのない問いのまま置いておきたかったのではないのか？ ガブラーの編集根拠とそれに対する批判、およびその批判への回答については、ガブラーの寄稿論文に詳細を譲るが、問題点を要約すればおよそ次のようになる。ガブラーはこの下線部を復元した根拠として、ジョイスの最終草稿（清書）に加え、その後の指示を加筆してタイプリストに渡したはずの今は失われてしまった作業草稿（清書前の草稿）を推定して挙げたのである。ガブラーは結果的にジョイスが草稿からタイプ稿に移る段階で熟慮の末にこの下線部を削除した可能性を排除してしまった。しかも今は失われてしまった作業草稿を根拠にしたこの大胆なテキスト編集は、多くの研究者を戸惑わせることにもなった。

「愛」のくだりをめぐる未だ決着のつかない問題にこれ以上踏み込み、解決を図ろうというつもりはない⁷。ただ重要なのは、講演会でも質疑応答でガブラーに直接確認したことだが、彼はここで「決定版」(the definitive edition) を目指したわけではないということである。1984年版の右ページ、もしくは1986年版だけを見ている読者は決定的に見落としていることになるのだが、ガブラーは全体を見通す一つの方針（すなわち最終草稿準拠）を立て、それを地にテキストの生成過程が順次図として浮かび上がってくるような〈動的な本文〉を提示したに過ぎない。そして問題を含む編集上の判断については、尾注でその根拠を提示している。右ページの本文はその演繹の結果であり、それ以上でも以下でもない。どこかに〈正しい本文〉があって、ガブラー版がそれに近いとか遠いなどと論じるのは、的外れのように思える⁸。

6 例えば、以下の記事はこの問題をめぐる論争の一端を伝えている。“The Love Word,” *James Joyce Literary Supplement*, vol. 3, 1989, pp. 17–18. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/26634463>. Accessed 11 Nov. 2024.

7 この問題を正面から扱った論考として山田久美子「Ulysses 改訂版の“love”をめぐって」*Phoenix* 第29号、1987年、pp. 3-17がある。

8 もっとも、ガブラーの草稿解説が適正だったかどうかを検証し、そこでガブラー版の成否を論じるのは妥当であろう。キッドはそれを宣言して膨大な検証をしたようだが、残念ながら客観的評価を受ける

では、ここからはそのガブラー版『ユリシーズ』を使いこなすための簡単な指南をしておこう。そもそもガブラー版『ユリシーズ』は、テキストの複雑な生成過程や膨大な異同を可視化するために独特の記号を採用しており、しかもそれが編集文献学で使われる一般的な記号と異なるために、煩雑・難解という批判を浴びてきた。私見では、まず第3巻巻末にある Textual Notes で挿話ごとの生成過程と現存文書を把握しておくといよい (Documents と Levels の項目)。ジョイスは原則として草稿→タイプ稿→雑誌校正→雑誌修正→単行本校正という順序で書き進めていくが、全ての文書が現存しているわけではないので、ところどころに欠落がある。問題になる個所は Comments で説明されている。次に、第一巻巻頭 Symbols の第2節 “List of Emendations and Footnotes” を見る。ここには本文脚注で使用される文書記号が説明されているが、文書の作成された時期とそこに書き込みが行われた時期は一致しないので注意されたい。どの文書に誰がどのように書き込みを行ったかがわかる。R は最終草稿、B, C, D… は第1、第2、第3タイプ稿、() 付きは現存しない文書。大文字の左側に添えられた小文字、a は著者、s は筆者、t はタイプイスト、e は編集者による加筆・指示を示す。この第2節を理解した上で第1節 “Synopsis” を見る。前半部 “Revisions within one document” は同一文書の中で、後半部 Revisions in the progression of documents は前後する文書の間で、それぞれいつどのような変更(加筆・削除・書き換え)が行われたかを知るための記号が説明されている。そして最後に第3節 “Historical Collation List” を見る。こちらは初版刊行後の各種刊行本と校合するための記号である。異本との校合は第3巻末尾の Historical Collation に列挙されているが、例えばここで 22-61 と記載されている異同は、初版からランダムハウス改訂版までにはなかった新しい読みを示すもので、問題含みの異同ということになるだろう。

以上、第3巻巻末の Textual Notes、第1巻巻頭の Symbols (第2節、第1節、第3節)、そして第3巻巻末の Historical Collation を概観した。テキストの生成過程、各文書の性質(作成段階と加筆段階)、文書内での変更と文書間での変更、そして刊行本間の異同——そうした異なるレベルの問題を混同せずに見通せるようになるには一定の訓練が必要だろうが、それに慣れてくるといろいろ面白いことが見えてくる。ここまで抽象的な解説をしてきたので、最後に——「愛」のくだりのように大きな論争点ではないが——ささやかな加筆・異動に面白い読みが隠れている例を紹介して本稿を閉じよう。

『ユリシーズ』第4挿話は、初めて本編の主人公レオポルド・ブルームが登場する場面で、多くの読者が記憶しているところであろう。ダブリン市内エクルズ通りにあるブルーム夫妻宅の朝の情景。夫のブルームは好物の臍物を調理しながら、飼い猫の相手をしている。妻はまだベッドの中だ。ブルームが猫を見ながらその知能に想いを馳せるくだりをガブラー版で読んでみる。

——猫ちゃんにはミルクをあげようね。彼は言った。

——ムルクニャーオ！ 猫が叫んだ。

形で刊行されるには至っていない。

みんな猫をバカと言う。けれど人が猫の言うことをわかるより、猫は人の言うことをわかってる。自分が理解したいことは全部わかってる。それに執念深い。残酷なんだ。それが猫の性質。ネズミが食われるときに悲鳴を上げないのはなぜだろう。まるで喜んでるみたい。俺はこいつにどう見えてるんだろう。塔のように高い？ いや、飛び越えられるんだから。

——この子はヒヨコが怖いんだよなあ。彼はからかうように言った。ピヨピヨさんが怖いのかい。お前みたいにバカな猫、見たことない。

——ムルクルニャーオ！ 猫は大きな声で鳴いた。(4.24-32)⁹

同じ場面を初版で読んでみる。

——猫ちゃんにはミルクをあげようね。彼は言った。

——ムルクニャーオ！ 猫が叫んだ。

みんな猫をバカと言う。けれど人が猫の言うことをわかるより、猫は人の言うことをわかってる。自分が理解したいことは全部わかってる。それに執念深い。俺はこいつにどう見えてるんだろう。塔のように高い？ いや、飛び越えられるんだから。

——この子はヒヨコが怖いんだよなあ。彼はからかうように言った。ピヨピヨさんが怖いのかい。お前みたいにバカな猫、見たことない。

残酷なんだ。それが猫の性質。ネズミが食われるときに悲鳴を上げないのはなぜだろう。まるで喜んでるみたい。

——ムルクルニャーオ！ 猫は大きな声で鳴いた。¹⁰

要するに「残酷なんだ。……まるで喜んでるみたい。」の位置が変わっている。この異同はガブラー版の Historical Collation に記載されており、それによれば22-61すなわち初版からランダムハウス改訂版まで、この4文は「見たことない。」の後に独立した段落で置かれていて、ガブラー版で初めて前半の長い段落に置き直されたことになる。さらにガブラー版の左ページを見れば、この段落の原文は次のような記号を付されている。

They call them stupid. They understand what we say better than we understand them. She understands all she wants to. [²Vindictive too. ^Cruel. Her nature. Curious mice never squeal. Seem to like it.^ Wonder what I look like to her. Height of a tower? No, she can jump me.²] ¹¹

これは [²と²] で囲まれた “Vindictive . . . me.” の部分が『ユリシーズ』校正第2段階で

⁹ Joyce, *Ulysses*, Garland, 1984, vol. 1, pp.106-9.

¹⁰ Ibid; and Joyce, *Ulysses*, Oxford UP, 1993, pp. 53-54.

¹¹ Joyce, *Ulysses*, Garland, 1984, vol. 1, p.106.

加筆されたこと、そして[^]と[^]で囲まれた“Cruel . . . like it.”の部分はその加筆部分にさらに加筆されたことを示す。このさらなる加筆部分が、印刷所で誤って「見たことない。」の後に挿入され、初版出版に至るまでジョイス自身によっても見^レ過^レご^レされたか、あるいはそれでよしと判断されたか、どちらかをしたものと思われる。それをガブラーは校正原稿にまで遡って確認し、この位置づけを誤りと判断したのであろう。よってガブラー版において初めて正しい位置に補正されたのである。

ただ、ここには難しい問題も孕んでいる。編集文献学的手続きにおいてこの補正が適正であったとしても、ジョイスがこの位置づけを事後的に是認しなかったことは証明できないし、またテキスト読解上もそれが正しいと断言できないからである。これは「内的独白」という『ユリシーズ』独特の物語語法の性質に根差す問題である。一見、「残酷なんだ。……まるで喜んでいてみたい。」のくだりは「それに執念深い」から直接続く思念であって、ヒヨコが怖い云々の発話の後に来るのは不自然であるように思える（したがってガブラー版の補正はテキスト内論理からも一応は支持できる）。しかし、ジョイスの内的独白は必ずしもそうした明快な論理に従わないことがある。「執念深い」のあと、自分がどう見えるか、高いか、いや飛び越えられる、それなのにヒヨコが怖いなんて……と思念が続いてから、急にまた「執念深い」から続く「残酷なんだ」という思念が来ることも、ありえないことではないのだ。もっと言えば『ユリシーズ』はそうした〈遅れて来る認識〉（小規模なアナグノリススと言ってもよかろう）に溢れ、それによって織り上げられたテキストであるとも言えるのである。したがって、一概に初版よりガブラー版の方が優れたテキストであるとは断言できない。ジョイスが版組みの際に偶然発生した〈遅れて来る認識〉を是とした可能性は否定できないのである。

この猫をめぐる思念は「愛」のくだけりほど作品全体の解釈に影響を及ぼす大問題ではないし、実際このことを殊更に取り上げた批評家もない。むしろこうした小さな異同は『ユリシーズ』の中に無数に存在している。しかし、そのひとつひとつにテキストの読みの幅を広げる契機が隠れているとしたら、それを解きほぐして味読する手がかりを与えてくれるのがガブラー版『ユリシーズ』なのである。ガブラー版『ユリシーズ』が孕む面白い読みの可能性は、まだいくらかも掘り起こされずに残っている。ジョイスのテキストに魅了された研究者たる者、このひっそりと眠る宝の山に挑戦しない手があるか。

参考文献

- Gifford, Don, and Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated: Notes for James Joyce's Ulysses*. Revised and expanded edition, U of California P, 1988.
- Joyce, James. *Ulysses*. Edited by Jeri Johnson, Oxford UP, 1993 [the 1922 text].
- . *Ulysses*. Vintage, 1990 [the 1961 text].
- . *Ulysses*. Edited by Danis Rose, Picador, 1997.
- . *Ulysses*. Edited by Danis Rose and John O'Hanlon, Riverrun, 2021.
- . *Ulysses: A Critical and Synoptic Edition*. Edited by Hans Walter Gabler et al., 3 vols, Garland, 1984.
- . *Ulysses: The Corrected Text*. Edited by Hans Walter Gabler et al. Vintage, 1986.
- . *Ulysses: Based on the 1939 Odyssey Press Edition*. Edited by Sam Slote et al., Alma Classics, 2012.
- “The Love Word.” *James Joyce Literary Supplement*, vol. 3, 1989, pp. 17–18. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/26634463>. Accessed 11 Nov. 2024.
- Rossmann, Charles. “The Critical Reception of the ‘Gabler *Ulysses*’: or, Gabler’s *Ulysses* Kidd-Napped, part 1.” *Studies in the Novel*, vol. 21, no. 2, summer 1989, pp. 154–81.
- . “The Critical Reception of the ‘Gabler *Ulysses*’: or, Gabler’s *Ulysses* Kidd-Napped, part 2.” *Studies in the Novel*, vol. 22, no. 3, fall 1990, pp. 323–53.
- . “The ‘Gabler *Ulysses*’: A Selectively Annotated Bibliography.” *Studies in the Novel*, summer 1990, vol. 22, no. 2, pp. 257–69.
- Sandulescu, C. George, and Clive Hart, editors. *Assessing the 1984 Ulysses*. Colin Smythe, 1986.
- Slote, Sam, et al. *Annotations to James Joyce's Ulysses*. Oxford UP, 2022.
- 山田久美子「*Ulysses*改訂版の“love”をめぐって」*Phoenix*第29号, 1987年, 3–17頁.

Gabler's Love, the Cat's Cruelty:
Report of the Introductory Workshop for the Gabler *Ulysses*

Kazuo Yokouchi

This note provides a report of my contribution to the introductory workshop for the Gabler's *Ulysses* which was conducted with Kiyoko Myojo and Yoshimi Minamitani in advance of Hans Walter Gabler's lecture (via Zoom) at Room 008, Building 8 of Seijo University, on 15 October 2023. My presentation consisted of a survey and explication of the structure and symbols of the Gabler *Ulysses*, a brief demonstration of how to use the Gabler *Ulysses*, and a few examples of my findings in the Gabler *Ulysses* that might awaken an interest among the audience in the textual editing of James Joyce's modern classic. In this note, after surveying the first two parts quickly I focus on two particular examples of Gabler's emendation, one concerning Stephen Dedalus's interior monologue about love, which proved the most controversial of Gabler's readings and would be addressed once again in his lecture, and the other concerning Leopold Bloom's reflections on his cat, which has escaped critical attention so far yet seems to me a good test case for relishing the difficulty of editing Joyce's text. My conclusion is that Gabler's edition, if not intended to offer *one* definitive edition, presents *different* readings synoptically and thus invites us to inexhaustible discussions about textual scholarship.